

## クレチアン・ド・トロワ作『荷車の騎士』の変容

秋 篠 憲 一

### はじめに

ダンテ (Dante) 作『神曲』(*La Divina Commedia*) 第5歌において、ウェルギリウス (Virgil) とともに地獄を巡るダンテは、地獄の第二圏谷に入る。そこでは愛欲におぼれて罪を犯したものがいる。媚薬のためとはいえ、伯父の妻であるイズー (Iseult) を愛したトリスタン (Tristan) もいる。やがてダンテは、パオロ (Paolo) とフランチェスカ (Francesca) に出会い、夫の弟であるパオロを愛してしまったフランチェスカから罪深い愛の発端を聞かされる。彼女は次のようにそのいきさつを語る。

We read one day for pastime of Lancelot, how love constrained him. We were alone and had no misgiving. Many times that reading drew our eyes together and changed the colour in our faces, but one point alone it was that mastered us; when we read that the longed-for smile was kissed by so great a lover, he who never shall be parted from me, all trembling, kissed my mouth. A Galeotto was the book and he that wrote it; that day we read in it no farther. (Canto V, 127-38)

おそらく二人の恋人たちは、流布本物語群 (the Vulgate Cycle) の『ランスロット』本編 (*Lancelot propre*) を読んでいたのであろう。その物語では、ガルオー (Galehaut) がアーサー (Arthur) 王の王妃グウィネヴィア (Guenevere) とランス

ロット (Lancelot) の不倫の愛の仲介役を果たす。“A Galeotto was the book and he that wrote it” (*Galeotto fu li libro e chi lo scrisse* [Sinclair Canto V 137]) の箇所は、王であり騎士であるガルオーが愛する騎士ランスロットのために王妃との逢瀬の筋書きを書き、王妃とランスロットの罪深い初めての接吻を実現させたと解釈できるであろう。『ランスロット』では、王妃とランスロットの愛、またランスロットなしでは生きていけないガルオーとランスロットの騎士同士の愛という複雑な関係と、罪深い騎士ランスロットに聖杯探求に成功する聖なる騎士ガラハッド (Galahad) が誕生するいきさつが語られるが、現存する作品の中で、はじめてグウィネヴィアと騎士ランスロットの愛が描かれたのは、12世紀フランスの詩人クレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) が書いた『荷車の騎士』 (*Le Chevalier de la Charrete*) のなかにおいてである。

『荷車の騎士』の序文のなかで、クレチアンはこの物語を書くことになったいきさつについて次のように語る。

Since my lady of Champagne  
Wishes me to begin a romance,  
I shall do so most willingly,  
As one who is entirely at her service  
In anything he can undertake in this world.

.....

Chrétien begins his book  
About the Knight of the Cart;  
The source and the meaning are furnished and given him  
By the countess, and he strives  
Carefully to add nothing  
But his effort and diligence;

Now begins his story. (1-5, 24-29a)

詩人はシャンパーニュ (Champagne) 伯爵夫人マリー (Marie) から作品を書くことを依頼されただけでなく, “the source and the meaning” (*matiere et san* [Kibler 26]) を与えられたと述べる。この場合の “*matiere et san*” の解釈であるが, “*matiere*” は王妃グウィネヴィアの誘拐とランスロットによる救出であり, “*san*” に関しては, ダガン (Duggan) が述べるように, “the interpretation of the relationship between knight and lady as an adulterous love” (274) と考えることができる。このロマンスでは, 宮廷風恋愛の具体例が王妃とアーサー王の家臣ランスロットの愛によって示される。

やがて13世紀になると『荷車の騎士』は流布本物語群の一つである『ランスロット』本編のなかで一つのエピソードとして使われ, ランスロットを愛したガルオーの死の直後に挿入される。またこの散文作品では, 父ランスロットを凌駕する息子ガラハッドの誕生が語られ, 当然のこととして12世紀の韻文ロマンスに改編が加えられる。さらに15世紀イギリスにおいて, 騎士であるサー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory) が『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*) を書くにあたって, 典拠の一つとし『ランスロット』本編を用いたと考えられており, このエピソードが, ランスロットへの片思いの恋ゆえに死んでいくアストラット (Astolat) の乙女の挿話とガウェイン (Gawain) の弟アグラヴェイン (Agravain) が中心となって王妃とランスロットの不倫関係が暴露される挿話との間に組み込まれ, 作者マロリーの巧みな翻案の技量がしめされる。マロリーがクレチアンの作品を知っていたかどうかは確かではないが, 『ランスロット』本編と比較しても, 大幅な変更がなされている。しかも荷車の騎士のエピソードに作者独自の恋愛論が加筆されている。本論文では, 12世紀に生まれた宮廷風恋愛論ともいべき韻文ロマンス『荷車の騎士』が13世紀のフランス, そして15世紀のイギリスにおいていかに受容され, 聖杯探求, アーサー王宮廷の崩壊を語る散文ロマンスの中でどのような

変貌をとげたのかについて論じ、時代を超えて人々の想像力を刺激するアーサー王ロマンスの魅力について考察してみたい。

## I

クレチアンは『荷車の騎士』を、キリスト昇天祭を迎えたアーサー王の宮廷の場面から始める。アーサー王の物語の典型的なパターンは、ある人物がアーサー王の宮廷を訪れ、そこから騎士たちの冒険が始まるのであるが、このロマンスでもゴール (Gorre) 国からある騎士がやってくる。じつは後ほどその国の王ボードマギユ (Bademagu) の息子メレアガン (Meleagant) であることがわかるのであるが。その騎士はアーサーに挨拶もせず、きわめて横柄な態度で、実は彼の国には、アーサー王が支配するログレス (Logres) の国の騎士や乙女、貴婦人たちが囚われているが、もし王妃グウィネヴィアを近くの森まで護衛する騎士がおり、その騎士が自分との戦いに勝てば、囚われの人々を解放してやるという。そこで家令のケイ (Kay) がその役を引き受けることになるが、あっけなくメレアガンに敗れ、王妃とともにゴールの国へと連れ去られる。この後ガウェインを先頭に王妃のあとを追跡するわけであるが、ガウェインは途中で兜をかぶった正体不明の騎士から馬の提供を依頼される。じつはこの騎士こそがランスロットである。ランスロットは王妃救出のために数々の冒険を経て最後の難関である剣の橋（剣そのものといってよい橋が激流に架かっており、しかも向こう岸には二匹のライオンが待ち構えている）を裸同然になって渡り、その傷だらけの体と勇敢さが彼の王妃への愛の強さを示す。この危険極まりない冒険の前にも、彼の騎士としての美徳と武勇、王妃への愛、彼がいかに “perfect lover” (3962) (*fin amant* [Kibler 3962]) であるかが描かれる。また教会の墓地での冒険では、ランスロットは7人の騎士が力併せて持ち上げようとしても不可能な墓のふたを見事にもちあげる。その墓には、このふたを持ち上げたものだけがゴールに囚われている人々

を解放し、やがてこの墓に眠ると文字で刻まれており、ランスロットがやがてこの墓に埋葬されることが予示され、しかもランスロットの使命が王妃だけではなくログレス国のひとびとをも救出することであることが明らかにされる。

クレチアン作のこのロマンスではランスロットは荷車の騎士と呼ばれる。ゴールの国に到着した彼は、さっそく王妃を誘拐した張本人であるメレアガンと闘うことになる。剣の橋を渡ったことで傷ついたランスロットは不利な闘いを強いられる。この苦しむ騎士を塔の上から見ていた王妃の侍女が機転をきかせて、その騎士が王妃が見ていることを知れば勇気を奮い起こすのではないかと考え、王妃にその騎士の名前を尋ねる。このときはじめて、今まで荷車の騎士として語られてきた騎士がランスロットであることが、聴衆・読者に知らされ、このあと乙女が大きな声で「ランスロット」と叫び、王妃の存在に勇気づけられた彼が、奮起一転、今までの形勢を逆転するが、結局は息子を死なせたくないボードマギユ王の懇願に王妃も同意し、闘いは中止となる。

王妃救出に乗り出したランスロットは物語の半ばまで正体不明の荷車の騎士として数々の冒険にチャレンジする。ガウエインから馬を調達したランスロットは、敵との戦いでその馬も失い途方にくれているところに荷車に乗った小人が通りかかる。その小人に王妃の消息を尋ねるが、この荷車に乗れば教えてやるという答えが返ってくる。実は、この時代、荷車は犯罪者を処刑場に運ぶ時に使われ、語り手は、“The guilty person was taken / And made to mount in the cart / And led through every street; / He thus lost his feudal rights / And was never again heard at court, / Nor invited nor honored there” (333-38) と述べ、いかに荷車に乗ることが騎士にとって恥ずべきことであつたかを詳述する。しかしながら王妃を追跡しなければならない騎士は、しばしの躊躇のあと荷車に乗る。その情景が次のように語られる。“The dwarf continued on his way / Without slowing down even an instant for the knight, / Who waited but two steps /

Before climbing in. / He would regret this moment of hesitation / And be accursed and shamed for it; / Later he would consider himself ill-fortuned” (360-64). ほんの二歩のたじろぎのために後ほど騎士は愛する王妃から冷たい仕打ちをうけ、二歩の躊躇が彼女に対する愛の不完全さを示すと非難される。この躊躇の背後には、理性と愛の葛藤があり、愛がその争いで勝利を収める。語り手は “But Love, which held sway within his heart; / Urged and commanded him / To climb into the cart at once” (372-74) と述べる。荷車に乗るなど狂気の沙汰と考えるガウエインを武勲では遙かに凌ぐランスロット、しかしその彼も愛のためなら、一瞬の躊躇はあれ、荷車にもあえて乗る。本来なら、荣誉ある騎士と結びつかない荷車が騎士の別名となるこの逆説ぶり。クレチアンは伯爵夫人マリーから “san” を与えられたわけであるが、その詩人がものしたこのロマンスが秘めた “san” とは何か、われわれに様々な解釈の可能性を与えてくれる。

メレアガンとの闘いのあと、ランスロットは、王妃追跡の途中別れたガウエインが向かった危険な「水中の橋」へと赴くが、不運にもボードマギユ王の家来たちに間違っって捕らえられてしまう。王を喜ばそうと思った彼らの行動が思いもよらぬ影響をもたらす。ランスロットが死んだという誤報が王妃にもたらされ、彼女は自殺まで考える。命がけでゴールにたどり着いた彼に対して、一瞥も与えない程冷淡な態度で臨んだ己の罪深さを痛感し、ほんの冗談でした行為が愛する騎士の命までも奪ってしまったことを懺悔する。彼女は嘆く、 “Oh misery! How it would have comforted me / If once, before he died, / I had held him in my arms. / How? Yes, quite naked next to him, / In order to enjoy him fully” (4224-29). 一方、ランスロットにも王妃が悲しみのあまり死んでしまったという噂が届き、恥の象徴である荷車に乗ったのも王妃への愛の証であったのに、その行為が王妃の不興を買ったのではないかと思い、絶望のあまり、首の周りに帯びを巻き、帯のもう一方の端を馬の鞍にくくりつけ、馬からわざと落ちて自殺を図るが失敗する。このあとランスロットは無事ボードマギユ王のもとにもどり、王妃は喜んで愛する騎士を迎える。ランスロッ

トは王妃に対して例の不興の原因について訪ねるが、彼女は、“What? Were you not ashamed / And fearful of the cart? / By delaying for two steps you showed / Your great unwillingness to mount. / In truth, it was for this that I did not wish / To see you or converse with you” (4484-89) と返答する。そしてランスロットの反応が次のように語られる。

“In the future, may God preserve me,”  
Said Lancelot, “from such a crime;  
And may He have no mercy on me  
If you are not completely in the right.  
My lady, for God’s sake,  
Receive my penance at once;  
And if ever you will be able to  
Forgive me, for God’s sake tell me so!”  
“Dear friend, may you be completely  
Forgiven,” said the queen.  
“I absolve you most willingly.” (4490-4500)

あたかも聴罪司祭が罪を犯した信者の告悔の秘蹟を行っているかのような場面である。このロマンスでは二人の愛の描写に宗教的な色彩が加えられるが、この特徴は、詩人の二人の宮廷風恋愛愛的な愛に対する態度を考察する上で重要である。まさに司祭であるかのような王妃から罪の赦しを得たランスロットは、王妃ともっとじっくりと話がしたいと言い、王妃は指ではなく眼で、ある部屋を示し、そこでの密会が約束される。本来、告悔の秘蹟は聖なる世界に属するものであるが、この偽装の秘蹟は、罪深い不倫の愛の一夜へとアーサー王の妻と彼の家臣を導くのである。

王妃とランスロットの同衾の場面は、『ランスロット』本編とマロリーの

作品に共通して使われ、荷車の騎士の物語にとって重要な意味を持つ。いよいよ愛する二人が密会する夜が訪れる。ランスロットは庭の果樹園を通して王妃の部屋の窓辺にやってくる。二人は手を握りあって逢瀬を喜ぶが、頑丈な窓の鉄格子が邪魔をしてランスロットは部屋の中へ入れない。そこで彼は鉄格子を外して部屋の中へ入ってもよいかと尋ねる。王妃の許しを得て、見事その鉄格子を引き抜く。しかしその時、指にひどい傷を負い、血がながれているのにも気づかず、王妃のベッドへと近づく。同じ部屋には傷ついたケイ卿が寝ているにもかかわらず。二人の同衾について語り手は次のように語る。

Although the window was quite high up,  
Lancelot passed  
Quickly and easily through it.  
He found Kay asleep in his bed.  
He came next to that of the queen;  
Lancelot bowed and worshiped before her,  
For he did not have this much faith in any saint.  
The queen stretched out  
Her arms toward him, embraced him,  
Hugged him to her breast  
And drew him into the bed beside her,  
Gazing as gently at him  
As she knew how to gaze,  
For her love and her heart were his.  
She welcomed him out of love;  
But if she had strong love for him,  
He felt a hundred thousand times more for her.



.....  
Lancelot had great joy  
And pleasure all that night,  
But the day's coming sorrowed him deeply,  
When he had to leave his love's side.  
Rising was a true martyrdom,  
So deep was the pain of parting;  
Indeed, he suffered a martyr's agony:  
His heart repeatedly turned  
To where the queen remained behind.

(4647-63, 4685-93)

語り手は、恐らく二人にとってはじめてであろう同衾の模様を宗教的用語を巧みに使いながら語る。

伯爵夫人マリーがクレチアンとともに庇護した礼拝堂司祭アンドレアス・カペルラス (Andreas Capellanus) は、*The Art of Courty Love (De Amore)* において、恋の四段階について "... the first consists in the giving of hope, the second in the granting of a kiss, the third in the enjoyment of an embrace, and the fourth culminates in the yielding of the whole person" (42) と述べる。またこの作品の中で、マリーは、1174年5月1日付けの手紙で、 "... love cannot exert its powers between two people who are married to each other. ... no woman, even if she is married, can be crowned with the reward of the King of Love unless she is seen to be enlisted in the service of Love himself outside the bonds of wedlock" (106-07) と断言するが、クレチアンは、アーサー王の妻グウィネヴィアが結婚の絆の外で、夫の家臣と、恋の第四段階において「恋の王」が与える報いをいかに享受しているかを描いていく。しかもこのキリスト教的倫理観からは断じて赦されない罪に汚れた不倫の愛を宗教的な語彙を織り交ぜながら叙述

する。宮廷風恋愛は、元来は逆説的な恋愛論で、“A lover should always offer his services and obedience freely to every lady, and he ought to root out all his pride and be very humble” (152) であるが、この愛する婦人（たいていは己より身分の高い貴族の妻）への奴隷のごとき愛の奉仕が、恋に墜ちた騎士の精神を高揚させるのである。従ってクレチアンは宮廷風恋愛の逆説的な特徴を巧みに描き出している。この密会の場面の極めつきは、“Indeed, he suffered a martyr’s agony” (*car il i suefre grant martire* [Kibler 4691]) である。中世に流行った、一夜をともしした恋人たちの夜明けの別れの悲しさをうたった衣衣の歌と同じように、クレチアンはランスロットの別れの悲しさを描くのであるが、その悲痛を殉教者のものに喩える。この場合、ランスロットにとって己の命を捧げるのはイエス・キリストではなく愛の神なのである。

ランスロットが王妃と別れたその朝、メレアガンが王妃の寝ている部屋を訪れ、ベッドが血でけがされているのを発見する。彼は、すぐ近くで傷を負って寝ていた家令ケイが王妃と同衾したと信じ、父親を呼んできて、父親が息子にさえ手を出させないよう、王妃の貞節を守ってきたことが何の意味もなく、王妃はアーサー王の家臣と不倫の罪を犯したと王妃とケイを告発する。そこへ、王妃が密かに呼びにやっていたランスロットが到着し、彼は王妃とケイの潔白を証明するためメレアガンと闘うことになる。決闘裁判が行われるわけであるが、この闘いでも、息子の命が危ないと思ったボードマギユ王が、王妃の同意のもとに闘いを中止し、決着はアーサー王の宮廷でつけることになる。だが、悪の化身のような策略に長けたメレアガンは、ランスロットを欺いて家令の館に幽閉し、そのあと堅固な塔を作り一年以上にわたって彼をわずかな食べ物を与えるだけで、その中に閉じ込めてしまう。幸運にもランスロットはその悪辣な騎士の妹によって塔から助けられ、アーサー王の宮廷での決闘裁判に間に合い、メレアガンとの決闘において勝利し、敵の首をはねる。

Lancelot approached, unlaced  
Meleagant's helmet and cut off his head.  
Never again would Meleagant deceive him:  
He had fallen in death, finished.

But I assure you now that no one  
Who was there and witnessed this  
Felt any pity whatsoever.  
The king and all the others there  
Rejoiced greatly over it.

Then the happiest among them  
Helped Lancelot remove his arms  
And led him off amid great joy.

My lords, if I were to tell more  
I would be going beyond my matter.  
Therefore I draw to a close:  
The romance ends here.  
The clerk Godefroy de Leigni  
Has put the final touches on the Knight of the Cart;  
Let no one blame him  
For completing the work of Chrétien,  
Since he did it with the approval  
Of Chrétien, who began it.  
He worked on the story from the point  
At which Lancelot was walled into the tower  
And finished it.

This much only has he done. He wishes to add nothing further,  
Nor omit anything, for this would harm the story.

## Here ends the romance of Lancelot of the Cart. (7086-7113)

ランスロットの勝利はアーサー王はじめ宮廷の人々に喜びをもたらす。しかし、王妃の身の潔白を証明する闘いであるのに、彼女のことには一切触れられない。しかも、なぜこの決闘裁判が行われるのか、しかもランスロットの勝利が、王妃とケイの不倫の疑惑を払拭するものであることも語られない。クレチアンは、若きアーサー王の華やかな陽気な宮廷を描くが、やがて王妃とランスロットの不倫がアーサー王の宮廷に悲劇をもたらすことには一言も言及しない。

この物語では、最後に思いがけないエピローグが、聴衆・読者を待ち構えている。実はこのロマンスには二人の作者がいたことがこのエピローグで明らかにされる。クレチアンは途中で筆を折り、続きをゴドフロワー (Godefroy) が書いたのである。このゴドフロワーが実在した人物なのか、クレチアンの創り上げた架空の人物なのかはわからない。セアラ・ケイ (Sarah Kay) は、クレチアンがペンネームで、ゴドフロワーが実名であり、このエピローグは詩人自身のユーモアたっぷりの仕掛けであると解釈しているが (34)、我々の興味をいやが上にもひく。たとえ二人の作者が同一人物であるとしても、なぜ物語りの途中で、しかもどの時点で一人が書くのをやめてしまったかである。エピローグではランスロットがメレアガンによって塔に閉じ込められたところでとわざわざ具体的にのべている。

ではなぜクレチアンは筆を擱いたのか。この問題を考える上で重要なのは、詩人の恋愛観である。たとえば、彼のロマンスの中で、第一作目と考えられているのが『エレックとイニード』(*Erec et Enide*) である。伯爵夫人マリーは、既述した彼女の手紙の中で、結婚した男女の間では真の愛は生まれないと断言しているが、クレチアンは、この第一作目のロマンスにおいてアーサーの騎士団ではガウェインに次ぐ騎士であるエレックと彼の妻イニードの結婚愛を描く。美しき妻を娶ったエレックは妻との愛の世界に溺れ騎士の本分を忘

れ、そのことによって世間の非難を浴び、ある日突然妻を引き連れて冒険の旅にでる。このロマンスでは様々な冒険を経て、二人の夫婦としての愛がどのように強め・高められていったかが語られ、騎士道と愛、そして愛で結ばれたふたりと社会との関係がテーマとなっている。社会から孤立した愛の世界が批判的に描かれ、男女の愛と社会との協調関係の大切さが説かれる。詩人は、イニードの髪を毛を描く時にも金髪のイズーの髪もこれほどの美しさをもっていないと述べ、媚薬を飲んでトリスタンと不義を犯すイズーへの批判的態度を暗に示している。また『イヴェイン』(Yvain)においても、妻との約束を違えた騎士イヴェインが、己の恥ずべき姿に絶望し、狂気に陥るが、命を助けてやったライオンとともに冒険の数々を経て、人間的に成長し、ついには妻の赦しを得、今まで以上の強い夫婦の絆で結ばれる過程が語られる。このように、詩人は、結婚した男女にも真の愛が生まれ、育まれるという考えを作品で表しており、果たして、庇護者マリーから与えられた“*matiere et san*”が心から歓迎すべきものであったか疑問が残る。王妃とランスロットの愛は典型的な宮廷風恋愛の具象化であるが、その描写に見られる誇張的、宗教的表現は、この恋愛観に対する詩人の批判的態度を如実に表明していると考えられる。王妃とログレスの人々を囚われの身から見事解放した武勇に秀でたランスロットも敵の謀略のために塔に幽閉され、その敵の妹によってかろうじて救い出される。これと同じように、マリーによって不倫の愛というテーマを押しつけられ、何とか筆を運んできたものの、もうこれ以上どのように筋を進めてよいかわからない詩人は、塔の中にとじこめられ、身動きもとれず途方にくれるランスロットと同じ状況に置かれたにちがいない。ランスロットは危うくメレアガンの妹に助けられたが、クレチアンはゴドフロワーによって助けられたことになる。ひょっとしたら、ランスロットが塔に幽閉されたところで、宮廷風恋愛については語り尽くしたと詩人は考えたのかもしれない。この愛は八方ふさがりで希望の光が見えないことを宮廷風恋愛の信奉者であるマリーに分からせるために。ジェフリー・チョーサー

(Geoffrey Chaucer) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) の、巡礼チョーサー自身が語るトパス卿 (Sir Thopas) の話では、話の途中で宿の亭主からストップがかかり、チョーサーは話を途中でやめてしまうが、中断されるまでに大衆向けの騎士道物語の特徴が全て出し尽くされ、これ以上続けてもほとんど意味はなく、まさにもっともふさわしいところで巡礼チョーサーは話を中断する。それと同じことがクレチアンにも言え、まさに計算しつくされた執筆放棄と言えよう。

## II

12世紀にクレチアンによって書かれた『荷車の騎士』はやがて13世紀初めに書かれた流布本物語群の『ランスロット』本編に組み込まれる。流布本物語群は最初に『ランスロット』本編が、そのあと『聖杯探求』(*La Queste del Saint Graal*)、『アーサー王の死』(*Mort Artu*) が書かれ、のちに『聖杯の由来』(*L'Estoire del Saint Graal*) と『マーリン』(*L'Estoire de Merlin*) が加えられる。(『ランスロット』本編、『聖杯探求』および『アーサー王の死』の三作品を総称して散文『ランスロット』と呼ぶこともある。) 元々独立したロマンスである『荷車の騎士』を聖杯探求、アーサー王の死という文脈の中で使うわけであるから当然のこととして典拠には何らかの変更が加えられる。ランスロットの物語に関しては、1220年頃に非流布本系の散文『湖の騎士ランスロット』(*Lancelot do Lac*) がフランス語で書かれている。ケネディー (Kennedy) は “Probably about 1220, there began the transformation of this pre-cyclic prose *Lancelot*, ending with the death of Galehot and without a Grail Quest, into a branch of a romance cycle” (*Lancelot of the Lake* xvi) と述べ、さらにランスロットと王妃との関係について “The relation of Lancelot and Guinevere is, indeed, presented in very positive terms throughout these adventures of the young Lancelot; the potentially destructive aspect of their love in terms of conflict with loyalty to king

and with a Christian socety is avoided” (*Lancelot of the Lake* xi-xii) と論じる。この非流布本系の物語は、ガルオーの悲劇的な死で完結するが、ガルオーがランスロットと王妃の愛に関わる重要な人物として描かれ、『ランスロット』本編と多くの共通点をもっている。

マロリーが原拠として用いた『ランスロット』本編では、ガルオーは、アーサー王との戦いの中で、ランスロットに一目惚れをして、彼と堅い友情で結ばれる。しかしながら、この友情は単なる騎士同士の友情ではなく、男女の愛を彷彿とさせるもので、ゴント (Gaunt) が “... the language and codes of *fin’ amor* are used to describe Galehaut’s love” (198) と指摘しているように、単なる騎士同士の友愛ではない。ガルオーは、アーサー王の軍勢と戦うが、その時ランスロットは己の正体を明かさずにアーサー王側に味方し、すばらしい武勲をあげるが、ガルオーはランスロットの武勇に惚れ込んでしまう。しかも彼は、ランスロットが王妃に愛の告白をするときに仲介役を果たす。このとき、ランスロットは、仲介役であり、ランスロットを愛すガルオーの目の前で、王妃からはじめての接吻を与えられる。このパオロとフランチェスカが魅惑されたシーンはこの三人の複雑な関係を如実に伝えている。

ガルオーの騎士同士の友愛を超えたランスロットへの愛とはいかなるものか。ガルオーのランスロットへの思いが、ある出来事の中で描かれる。ある日王妃が窮地に陥る。彼女の偽物が現れ、我こそが真の王妃であると名乗りでる。この女性は王妃の異父姉で顔かたちも王妃そっくりでアーサーも葉を飲まれこの偽物の術中にはまり、王妃は有罪の場合処刑されることになる。そこでガルオーが、己の領国に王妃をかくまうことをランスロットに提案する。

... I would give up all the lands under heaven rather than lose your companionship and your love. Indeed, if I can count on your commitment, I can easily overcome any woes; but if I lose you, I can only die.

“That is why, by God, I beg you to make every effort to preserve our love; and when you’re with my lady the queen, urge her, as I’ve said, to let us stay together, and I will urge her, too. Besides, if you love each other at all, you should want to have her with you forever; and then we would all be together, never to part.” (*Lancelot-Grail* II: 249)

初めてのキスの場面のよう、たとえランスロットと王妃が愛し合っている、ランスロットを愛するガルオーは常に彼のそばにいたいのである。彼のそばにいないければガルオーは死ぬしかないのである。そんなガルオーが、ある日、ランスロットが自殺したかもしれないと思い込み、絶望のあまり、食事を絶ちこの世を去る。このランスロットをこよなく愛したガルオーの死が語られたあとに、クレチアンの『荷車の騎士』の翻案が組み込まれる。

『ランスロット』本編では、荷車の騎士の物語の本筋に入る前に、ランスロットのことが短く語られる。ランスロットは、モルガン・ル・フェイ (Morgan Le Fay) によって幽閉され、クリスマスまで王妃に会わないという約束を条件に解放されるが、その悲しみを和らげるためにガルオーのいるソルロワ (Sorelois) に行くが、そこに彼はおらず、あまりの悲痛のために鼻血を出し、彼のベッドが血に染まる。そのため彼が去ったあとベッドの血を見たものたちは、彼が殺されたと考える。ちょうどそこへガルオーがもどって来て、いきさつを聞かされランスロットが死んだいや自殺したと確信する。王妃には会えず、心を分かちあえるガルオーにも会えず、悲しみに沈んだランスロットは、食事もほとんどとれず、しかも眠れずに狂気に陥る。そんな折、湖の婦人 (the Lady of the Lake) に出会い、幼い彼を養い育てた彼女によって狂気を癒される。しかし彼女は、ガルオーの死については、一切彼に明かさない。元気になった彼に、彼女はキリスト昇天祭の日にアーサー王の宮廷に行くように命じる。なぜかと問うランスロットに対して “. . . the queen will be abducted. If you are present, you’ll rescue her from the place from which no one has



ever been rescued” (*Lancelot-Grail* III: 3) と答える。そして次のように語られる。  
“And so she made him set off two weeks before Ascension, so that he arrived precisely at noon in Camelot at the spot where Kay lay beaten and wounded because of the queen whom he had been accompanying , just as the story of the Charrette tells it” (*Lancelot-Grail* III: 3) (*Si le fet movoir .XV. jors devant l’Acension, si qu’il vint a droite ore de midi a Camaalot en la place ou Kex li seneshals fu abatus et navrés por la roine qu’il conduisoit, si com li contes de la Charete le devise* [Micha II: 2]). 引用中の “the story of Charrette” はもちろんクレチアンの『荷車の騎士』を指している。いよいよこのあとほぼ原作のプロットの展開通りにランスロットの王妃救出と二人の愛が描かれる。

ランスロットと王妃がゴールの国で愛の一夜を楽しむ前に、ランスロットは、原作と同じように王妃の彼に対する冷淡な態度の訳を聞く。実は、『ランスロット』本編ではモルガンによって捕らえられたランスロットは、王妃からもらった指輪をモルガンによって奪われ、モルガンは、侍女に証拠としてその指輪を持たせアーサー王の宮廷に使者として送り、ランスロットが王と王妃に対して恥ずべき罪を犯したことを告白したと伝えさせる。それに対して王妃は、神に誓って “I want God and every one to know . . . that between Lancelot and me there never was a guilty love” (*Lancelot-Grail* II: 324) (*Et tant sache Diex . . . et tos li mondes que je n’oi onques a Lancelot ne il a moi amor vilaine* [Micha I: 353]) と反論する。王妃はランスロットに与えた愛の印である指輪をモルガンが持ち、しかもそれを悪用したことに対して彼に不満を抱いたのである。この散文ロマンスでは、小人から荷車に乗れば王妃の消息がわかると言われて、ランスロットはさっさと荷車に乗る。原作のように彼の心の中での愛と理性の葛藤もなく躊躇もない。上記のような全く違う理由で王妃は冷たい態度をとる。原作では恥の象徴である荷車に躊躇しながら乗る、愛に支配される騎士ランスロットが強調されるが、この散文作品では荷車の象徴的意味がなくなってしまう。

そしていよいよ二人の同衾が描写される。密会では、王妃によるガルオーの死への言及など、この散文ロマンスの特徴が示される。

She lay down, and he pulled the iron bars out of the window frame so softly that he did not make any noise or break any of the bars; then he thrust himself through the window. There was no candle or light in the room, because Kay had complained about the brightness.

As Lancelot climbed into her bed, the queen felt the blood that was dripping from him; it fell from his hands, where the skin had been broken by the sharp edge of the iron bars. But she thought that it was Lancelot's perspiration, and neither of them paid any attention to it. And then she told him about the death of Galehaut, of which he knew nothing. Lancelot would have grieved bitterly, except that it was not the place to mourn, and so they gave each other great pleasure. As day neared, they separated and Lancelot went back through the window, returning the iron bars to the places from which he had removed them. Then he took leave of his lady and went to sleep so quietly that no one knew anything about their encounter. (*Lancelot-Grail* III: 24)

この二人の密会の場面であるが、原作との違いがある。散文作品では、この前に二人はすでに肉体関係を持っており、恐らくはじめての同衾であったであろう原作の宗教的な表現を用いての悦楽の描写とは異なって “and so they gave each other great pleasure” (*si fu la joie assés grans qu’il s’entrefirent* [Micha II: 76]) ときわめてあっさりした描写になっている。宮廷風恋愛の第四段階の誇張ともとれるような詳細な描き方はない。特に特徴的なのは、あの死んだガルオーがこの二人の愛の一夜にも影響を及ぼしていることである。湖の婦人も敢えて隠していた彼の死をなぜ王妃はベッドの中でランスロットに伝えた

のか。王妃はすでにガルオーのランスロットへのただならぬ愛を知っている。ベッドの中でガルオーの死を持ち出して、ランスロットの自分への愛を確かめたかったのではないか。ここには、死んだとはいえ、王妃のガルオーへのライバル意識が見て取れる。一方、ランスロットは、愛するガルオーの死を聞かされ、どうしたか。快樂の時を過ごすだけである。悲しみのために王妃との肉体関係を拒絶することもない。同衾のあと安らかに眠りにつく。あれほど自分を愛したガルオーのことを思い出しながら、悲しい眠れない夜を過ごすのではない。ランスロットはまさにこの日から王妃との不倫の愛にのめり込んでいくのである。

『ランスロット』本編ではもう一つ大きな変更が加えられている。王妃が幽閉されているゴールの国に到達するまでにランスロットは様々な冒険・困難を克服していくが、その中で不思議な墓の冒険がある。原作では、ゴールに囚われている人々を救い出すことができる者だけが、その墓のふたを開けることが出来る冒険で、見事に成功し、その墓がやがて自分が眠る墓であることを知るが、散文ロマンスでも墓の冒険がランスロットを待っている。修道院に二つの墓があり、一つの墓にはブリテン島に聖杯をもたらしたアリマテアのヨセフ (Joseph of Arimathea) の息子であるガラハッド (Galahad) が埋葬されており、その墓のふたを開けることが出来た者は、ゴールから囚われの人々を解放することになるのであるが、彼はこの冒険に成功する。もう一つの墓にはアリマタヤのヨセフの甥であるシメオン (Simeon) が埋葬されており、ランスロットはこの墓のふたをもちあげることができない。墓の中からシメオンの次のような声が聞こえてくる。“And from your lineage will come the one who will deliver me and will fulfill the adventures of the Perilous Seat and who will bring the adventures of Britain to an end” (*Lancelot-Grail* III: 13). この声はランスロットの息子で聖杯探求に成功するガラハッドについて言及する。そして、ランスロットがこの冒険にはふさわしくない理由を伝える。“You should have realized that if you weren’t a sinner you would have accomplished all

the marvelous deeds that your kinsman will accomplish and that you have lost all this because of your father's sin, for he sinned one single time against my cousin, your mother" (*Lancelot-Grail* III: 13). ランスロットの父であるバン(Ban)王の不倫の結果、ランスロットの異母弟エクトル (Hector) が生まれたことが非難される。また“your kinsman”とはランスロットの息子ガラハッドのことである。ランスロットの王妃との不倫の罪が原因であるとは明確に述べられていないが、ブルックナーが“... it [the Cart episode] marks an important shift in Lancelot as hero, still the best of Arthurian chivalry but not ‘the good knight’ who will achieve the Grail” (95) と論じるように、この散文の荷車の騎士の物語が、やがて起こる聖杯の探求を視野に入れながら語られていることは重要である。この王妃救出の物語では、興味深いことにランスロットが失敗する冒険が語られるのである。彼を凌駕する騎士がやがてこの世に誕生するのである。そしてその騎士が成功するこの聖なる冒険では、ランスロットは、森の隠者に王妃との不倫の罪を告白し、それを赦されるのであるが、その罪のために聖杯を仰ぎ見ることができない。この13世紀に書かれた散文の「荷車の騎士」において、12世紀に誕生したクレチアンの、暗い影のささない、ある意味では楽観的でユーモラスで少し皮肉を込めた宮廷風恋愛の物語は、円卓騎士団の崩壊を予感させる罪深い不倫の愛の物語へと変容したのである。

### III

散文で書かれたアーサー王伝説の集大成とも言える『アーサー王の死』が15世紀に騎士であるマロリーによって書かれ、ウィリアム・キャクストン (William Caxton) によって活版印刷で出版される。マロリーはこのロマンスの中に荷車の騎士の物語を巧みに組み込んでいる。荷車の騎士のエピソードはキャクストン版では、第19巻に登場する。聖杯探求の後に起こる、王妃が晩餐のリングに毒をもって騎士を殺害したと嫌疑をかけられる毒リング事件

とアストラットの乙女エレイン (Elaine) のランスロットへの片思いとその死が第18巻で語られ、また第20巻ではガウェインの弟アグラヴェインとモルドレッド (Mordred) による王妃とランスロットの不倫の告発と処刑宣告された王妃のランスロットによる救出が描かれる。マロリーは18巻以降は、14世紀にイギリスで書かれた『アーサー王の死』(*Le Morte Arthur*) と流布本物語群の*La Mort le Roi Artu*を使うのであるが、第19巻だけは、そうではない。ノリス (Norris) は“... Malory leaves the *Mort Artu* and *Le Morte Arthur* and takes the next episode [the Knight of the Cart] of the tale from either the Vulgate *Lancelot* or Chrétien's poem” (120) と述べているが、マロリーがクレチアンの原作を読んでいたという確証はない。散文『ランスロット』本編を使った可能性が高い。

問題はなぜマロリーがエレインの死の後にこの荷車の騎士のエピソードを挿入したのかである。

エレインはランスロットへの愛が拒絶されたあと、食を絶ち、焦がれ死にする。まさに彼女にとってこの愛は命がけの愛であった。彼女の紅い袖を兜につけウィンチェスター (Winchester) の馬上槍試合で活躍したランスロットであったが、彼女の袖を身に帯びたのも正体を隠して己の武勲を勝ち取るためであり、その榮譽も全て愛する王妃に捧げるためであった。純粋に愛した乙女の悲劇的な死によって思い出されるのは散文『ランスロット』本編においてランスロットが死んだと信じ込み、食を絶ってランスロットへの愛ゆえに死んでいくガルオーの悲劇である。マロリーは第6巻のランスロットの冒険譚では、明らかにこの原拠を使っており、荷車の騎士のエピソードでも同じくこの材源を使ったと考えられる。エレインの死は作者にガルオーの死を思い出させたにちがいない。しかもガルオーの死のあとに荷車の騎士のエピソードが組み込まれていることも。ちなみに、大いに興味をそそるところであるが、『ランスロット』ではガルオーは重要な役割を演じているが、マロリーのロマンスでは、彼は脇役的存在で、ランスロットを命がけで愛することもなく、ランスロットがエレインの袖を身につけて活躍した馬上槍試合にも参

加し、悲劇的な死を遂げる事もない。またランスロットは死後、その亡骸は「喜びの砦」に埋葬される。他方フランスの作品では、彼はすでに亡くなったガルオーとともにその中で永眠することになるが、マロリーはランスロットの墓からガルオーを排除し、ランスロットは一人で永眠することになる。ガルオーのランスロットへのただならぬ愛に違和感を覚えたのか、これほどランスロットにとって重要な騎士を脇役にまで貶めている。

また『ランスロット』では、聖杯探求の前に荷車のエピソードが挿入されるが、マロリーでは聖杯探求のあとである。聖杯探求においてランスロットは森に住む隠者に王妃との関係を絶つと誓うが、宮廷に戻った彼は、神との約束を忘れ、王妃をそれまで以上に愛し、とうとうメレアガンの城の中で王妃と同衾する。このときまでにすでに二人の間に肉体関係があったかどうか、作者ははっきりと語らない。この王妃誘拐の話で、はじめて二人のベッドシーンを描く。そして、聖杯探求の後の二人の愛の復活がやがてガウェイン兄弟による告発を誘発するのである。またこの文脈での荷車のエピソード挿入により、ランスロットは三度王妃の命を救うことになる。毒リング事件で告発された無実の王妃、メレアガンによってアーサー王の傷ついた騎士の一人と同衾したと告発された（実際はランスロットと寝た）王妃、そしてランスロットと一緒に寝室にいたところを捕らえられた王妃を窮地から救い出す。クーパー (Cooper) が述べるように、まさに “a series that follows a progression from her [Guenevere’s] innocence, to her innocence on a technicality, to a presumption of guilt” (161) である。この荷車の騎士のエピソード挿入は緊迫したプロットの展開をもたらし、二人の不倫の関係が円卓騎士団の崩壊の大きな要因であることを浮き彫りにする。この効果を作者は考えたに違いない。

マロリーでは、荷車の騎士物語は作者独自の恋愛論のあとに語られる。この恋愛論では、作者はまず “vertuouse love” について定義する。 “. . . firste reserve the honoure to God, and secundely thy quarell muste com of thy lady. And such love I calle vertuouse love” (III: 1119). なお引用はヴィナヴァー (Vinaver)

編ウィンチェスター版を用いる。この愛についてフィヒテ (Fichte) は “Love so defined corresponds to the love practised in Arthurian days. Its foremost representative is Guinevere, ‘that whyle she lyved she was a trew lover, and therefor she had a good ende’ (82) と論じているが、ここでフィヒテが見逃しているのが、作者が王妃のことを “vertuouse lover” と呼んでいないことである。まず “vertuouse love” では神を敬うことが第一であり、自分の愛する婦人のための闘いはそのあとのことである。果たして、神を蔑ろにして、王妃のための闘いをなによりも優先するランスロットは “vertuouse lover” と言えるのか。しかもその彼を愛した、不倫の罪を犯した王妃を。聖杯探求の途中で、ランスロットは王妃との罪を隠者に告白する時に、

... all my grete dedis of armys that I have done for the moste party was for the quenys sake, and for hir sake wolde I do batayle were hit ryght other wronge. And never dud I batayle all only [for] Goddis sake, but for to wyinne worship and to cause me the bettir to be beloved, and litill or nought I thanked never God of hit. (II: 897)

と述べる。マロリーは不倫の愛にもかかわらず、 “stabyllité” (III: 1119) を持った二人の恋人を “trew lover” と呼ぶのである。修道士として生を終えた兄ランスロットを讃えるエクトルの言葉の中に、 “thou were the trewest lover, of a synful man, that ever loved woman” (III: 1259) がある。またアグラヴェインたちに王妃との密会の現場を急襲されたランスロットは、王妃に “... all oure trew love ys brought to an ende, ...” (III: 1168) と言う。 “synful” であるが故に作者はランスロットと王妃を “vertuouse lover” と呼ばないのである。ここにこそ作者の二人に対する思いやりと共感の念が現れている。二人は、修道女、修道士となって己の罪を悔い、その結果 “good ende” を迎えるのである。二人は不倫の罪故に改悛を通して神へと導かれる。二人の罪は「幸いなる罪」

(*felix culpa*)なのである。

マロリーの恋愛論は、恋の季節である5月の描写で始まるが、それに呼応するかのよう、王妃誘拐の事件は5月に起こる。ちなみに、第20巻も5月への言及で始まり、この巻では“a grete angur and unhapp(e)” (III: 1161) が起こる。家令のケイ卿を含む10人の武装していない騎士をつれて王妃は五月祭りの花摘みにでかける。何年にもわたって王妃を深く愛していた円卓騎士団の一員であるメレアガンは、武装した多くの家来たちとともに王妃一行を襲いウェストミンスターから7マイルほどの所にある城へと拉致する。王妃は密かに若者をランスロットのもとへ使者として送り、救援を待つ。王妃の苦難を知ったランスロットはテムズ川を馬とともに渡り、救出へと向かうが、ランスロットが来ることを察知したメレアガンが部下を待ち伏せさせ、ランスロットの馬が殺される。しかたなくランスロットは、近くを通った荷車の馱者を殴り殺し（原作にはない）、その車に急いで乗り、敵の城にやって来る。荷車に乗ったランスロットを見た王妃の侍女が、恐らく処刑場に連れて行かれるのでしようと揶揄すると、王妃はランスロットを庇い、反対に侍女に非難の言葉を浴びせる。ここまでのプロットの展開を見てもわかるとおり、マロリーは散文『ランスロット』本編に大きな変更を加えている。メレアガンは、クレチアンでも『ランスロット』でも円卓騎士団の一員ではない。多くのログレスの人々が幽閉されているあたかも異界のようなゴールの国のボードマギユ王の息子である。しかもマロリーはメレアガンの王妃への愛を他の二作に比べて強調する。そしてメレアガンの居城は、ウェストミンスターから遠くない。そのためゴールの国に到達するまでに何日もかけて数々の冒険・試練を経てゆくランスロットに比べて、マロリー描くランスロットは、途中で馬に乗り換えることもなく、荷車に乗ったままで、剣の橋を渡ることもなく、王妃のもとにたどり着く。ランスロットがたどり着いたあと、他の二作品では、さっそくランスロットとメレアガンの決闘がおこなわれるが、マロリーでは、メレアガンが王妃誘拐の罪の赦しを王妃に乞い、ランスロットが



反対するにもかかわらず、王妃はあっさりとその罪を赦す。その理由として、彼女は、“I accorded never with hym for no favoure nor love that I had unto hym, but of every shamefull noyse of wysedom to lay adoune” (III: 1129) と述べる。王妃は醜聞を恐れるのであるが、アーサー王の妻が、彼女を愛する王の家臣によって誘拐されたというスキャンダルをなんとか穏便に処理したいということであろうか。しかし、このあとアーサー王の家臣であるランスロットと王妃は一夜を同じベッドで過ごすことになる。

マロリーでは二人の同衾とメレアガンの王妃告発、そして決闘裁判に焦点が絞られ、それ以外の、原拠で語られる出来事は一切削除されている。では二人の愛の一夜はどのように描かれるのか。

And than he sette hys hondis uppon the barrys of iron and pulled at them with suche a myght that he braste hem clene oute of the stone wallys. And therewithall one of the barres of iron kutte the brawne of hys hondys thorowoute to the bone. And than he lepe into the chambir to the quene.

“Make ye no noyse,” seyde the quene, “for my wounded knyghtes lye here fast by me.”

So, to passe uppon thys tale, sir Launcelot wente to bedde with the quene and toke no force of hys hurte honde, but toke hys plesaunce and hys lykyng untyll hit was the dawning of the day; for wyte you well he slept nat, but wacched. And whan he saw hys tyme that he myght tary no lenger, he toke hys leve and departed at the wyndowe, and put hit togydir as well as he myght agayne, and so departed untyll hys owne chambir. (III: 1131)

もちろんマロリーは、原拠にあるガルオーに関したものは一切削除している。ただ愛の喜びについては、ランスロットの視点から描いているが、できるだけ二人の肉体関係への言及を避けるマロリーとしては、これが精一杯の男女

の愛の描写なのであろう。典拠にないところとしては、ランスロットはあとからこの城にやって来たエレインの兄であるラヴェイン (Lavaine) に傷の手当てをしてもらい、傷を隠すために手袋をはめる。ランスロットは何としても、王妃との関係を世間から隠さなければならないのである。

マロリー翻案の荷車の騎士のエピソードの特徴がもっとも現れているのがランスロットとメレアガンの決闘裁判である。他の二作品では二人の闘いは、合計三度行われ、そのうち告発された王妃に関して決闘裁判は二回行われる。第一回目の闘いは、王妃を誘拐したメレアガンに対してランスロットが挑戦状をたたきつけるものである。ただ、この闘いと一回目の決闘裁判は、息子の命を心配したボードマギユが王妃に頼んで闘いを中断させることになる。マロリーでは、ボードマギユはいっさい登場せず、決闘裁判は一度だけである。ランスロットは敵の策略により一時牢獄に幽閉されるが、一人の女性に助けられ、ようやく決闘裁判に間に合う。決闘裁判の調印をするときにメレアガンはランスロットに次のように警告する。“I rede you beware what ye do; for thoughe ye ar never so good a knyght, as I wote well ye ar renowned the beste knyght of the wor[l]de, yet shulde ye be avysed to do batayle in a wronge quarell, for God woll have a stroke in every batayle” (III: 1133). これに対してランスロットは、“God ys to be drad! But as to that I say nay playnly, that thys nyght there lay none of thes ten knyghtes wounded with my lady, quene Gwenyver, and that woll I prove with myne hondys that ye say untrewly in that” (III: 1133) と返答する。この両者のやりとりはマロリー独自の書き加えであるが、すでに引用したようにランスロットは王妃のためならば“wolde I do batayle were hit ryght other wronge”と隠者に告白したわけであるが、果たしてここでのランスロットの闘いは正義の闘いなのであろうか。メレアガンの告発に関しては、王妃が10人のうちの一人と寝ていないので彼は“untrewly”に主張しているわけであるが、決闘裁判に臨んで王妃のために闘う騎士が同衾した張本人であり、「正義に反した闘いをするものに対して神は正しい裁きを下す」というメレアガ

ンの警告をランスロットはどのように受け止めたのか。“God ys to be drad”には、主君アーサーの妃グウィネヴィアとベッドを共にした直後のこの決闘裁判に対するランスロットの神に対する後ろめたい気持ちがあらわれている。

ランスロットは優位に闘いをすすめ、ついには、敵の兜の上に刀を振り落とし、相手は降参し命乞いをする。殺すかどうかの判断に迷うが、王妃が「殺しなさい」と言うかのごとく首を縦に振ったのを見て、再度敵に闘うチャンスを与える。ランスロットは、己の兜を脱ぎ、体の左半分の防具をとり、左腕も縛ってわざと不利な条件で闘うことを相手に申し出、相手もそれに応じる。再び闘いが始まるが、ランスロットの武力が勝り、敵の頭は真二つに割られ、決闘裁判において王妃の無実が証明される。神は、王妃と寝たランスロットには勝利を、円卓の騎士でありながら王妃を誘拐し、決闘裁判が決まったあと、ランスロットとの闘いを恐れ、彼に罫をしかけ、城中の牢獄に閉じ込めた卑怯で悪辣なメレアガンに死を与えるのである。

『ランスロット』本編では、決闘裁判のあとメレアガンの従兄弟が宮廷に現れ、命乞いをしたメレアガンを殺したランスロを糾弾するが、それに対してランスロは正当な行為であると反論し、一ヶ月後に二人はボードマギユの宮廷で闘うことになる。その従兄弟がメレアガンの亡骸を引き取って帰ったあと、久しぶりに宮廷に帰ってきたランスロットに、アーサーは、宮廷を離れていた間にどのような冒険に遭遇したのかを尋ねる。ランスロットはどのように答えたか。“Lancelot recounted some of them, and some of them he concealed” (*Lancelot-Grail* III: 33) (*et il l'en conta pluisors et pluisors l'en cela* [Micha II:110-11]) と語られる。アーサーはただちにそのことを記録するように命じるが、ゴールの国での王妃との一夜について、ランスロットは語らなかったにちがいない。

一方、マロリーでは、ランスロットによるウルリー (Urry) 卿の傷の癒しが語られる。聖霊降臨祭が間近に迫ったある日、カーライル (Carlisle) で宮廷

を開いていたアーサーのもとに、馬かごに乗り、母と妹に付き添われて、頭に三カ所、体と左手に四カ所傷を負った騎士ウルリーがやって来る。傷は馬上槍試合で負ったものであるが、ウルリーが殺した相手の騎士の母親が、そのことを恨み、魔術によって、この世でもっとも優れた騎士以外はその傷を癒せないようにしたのである。たまたまランスロットはそのときにアーサー王のもとにいなかったのであるが、アーサーを筆頭に110名の騎士が傷の癒しを試みるがことごとく失敗する。そこへランスロットが帰ってくるのであるが、なぜか傷の癒しをすることを拒む。再三にわたるアーサーの説得と命令により、ランスロットは“... Thou Blyssed Trynyté, Thou mayste yeff me power to hele thys syke knyght by the grete vertu and grace of The, but, Good Lorde, never of myselff” (III: 1152) と神に祈りながら、極めて遜った態度を示しつつ、傷をしらべると、たちどころに全ての傷が癒される。神の奇跡がアーサー王、ランスロット、110名の騎士たちの眼前で起こる。王と騎士たちは神に感謝を捧げるが、中でもランスロットについては、“And ever sir Launcelote wepte, as he had bene a chylde that had bene beatyn” (III: 1152) と描かれる。王妃を救うためにメレアガンと決闘裁判を戦い、しかもその戦いは正義の戦いではなかった。騎士道に悖る行為である。その罪深いランスロットが、神が示した恩寵である奇跡を目にして、ぶたれた子供のように泣く。この姿には騎士道の華と賞賛された彼の栄光の面影すらない。

キャクストン版の18巻から19巻にはなぜかランスロットが傷を負う場面が目立つ。ホッジズ (Hodges) は優れた騎士の負う傷に関して次のように肯定的解釈をしている。“In Malory’s *Morte Darthur*, good knights transform injuries into evidence of courage and commitment, opportunities to learn, and occasions for fellowship” (31). しかしながら、ホッジズは、ランスロットが王妃と同衾するために、本来は武勇のための力を、二人を隔てる頑丈な窓の鉄格子を壊すために使い、その結果として指に負う傷については、言及していない。この傷はランスロットの罪を象徴するものであり、彼の負った傷の中でも極めて重

要なものである。この傷こそ、ランスロットの王妃への献身的な愛の奉仕を示すものでありながら、円卓騎士団の団結を破壊する要因となるものであり、しかもその傷から出た血が王妃を窮地に陥れたことも忘れ、再び第20巻で王妃の寝室で密会することになる。マロリーは、二人が闇を共にしたかどうか語りたくない (III: 1165) と言って曖昧にするが、*Mort Artu (Lancelot-Grail IV: 121)* でも、八行連詩の『アーサー王の死』(1806-07) でも二人はベッドをともにする。ただし、イギリスの韻文ロマンスでは、ランスロットがベッドに入るやいなやアグラヴェインたちが部屋を急襲する。指の傷はランスロットにいささかの教訓も与えていない。他方ケリー (Kelly) はランスロットの傷に関して “... Malory intends the succession of wounds Lancelot receives in the first four episodes of the Lancelot and Guenevere to mark a gradual falling off from the true knightliness he had attained during the Quest through confession and repentance” (184) と解釈している。聖杯探求での告白に関しては、フランスの原作でははっきり王妃の名前を明らかにして罪を告白しているが、マロリーでは、“a quene” (II: 897) を、節度を超えて愛したと述べ、どの王の王妃かを敢えて言わず、これでは完全な罪の告白になっておらず、聖杯探求後の王妃との関係復活を暗示するものとなっている。しかし他の点では、ケリーの解釈は当を得たものとなっている。ケリーの言う “the four episodes” とは、毒リング事件で、決闘裁判で王妃を告発した騎士マドール (Mador) から腿に傷を受けたこと、エレインの袖を身につけた馬上槍試合で、従兄弟のボールス (Bors) によって脇腹に重傷を負わされたこと、森で狩りをしていた女性が放った矢が的を外れてランスロットの臀部に刺さったこと、誘拐された王妃の寝室に忍び込む時に窓格子を外した時の指の傷に関するものである。メレアガンは、すでに述べたように、決闘裁判の前にランスロットに対して “... God woll have a stroke in every batayle” と脅すが、ケリーはこの傷に関して、“God’s stroke has already fallen in the form of the torn hand which exposed the adultery to Melyagaunt and revealed Lancelot’s fallen knighthood to the reader”

(188) と鋭い指摘をおこなっている。ランスロットのウルリー卿の傷の癒しは、明らかに正義の闘いとは言えない闘いで、しかも指に例の傷跡が残る手でメレアガンを倒したその手で行われる。今までの騎士としての人生の中でこれほどの苦衷、己の罪深さと神への恐れを彼は味わったことはなかったのではないか。ヴィナヴァーはこの傷の癒しのエピソードについて、“... it [the episode] enabled him [Malory] to show his favourite hero, Lancelot, at the height of his glory” (III: 1591) と論じ、またケリーもこのエピソードのランスロットを “the ideal Christian knight who heals Urry” (191) と述べるが果たしてそうか。外面的な行為だけを見ればイエス・キリストのように傷の癒しを為したランスロットは栄光に輝く、理想的な “Christian knight” に見える。マロリーは、登場人物の内面を詳しく描くことより、会話、動作によって読者に登場人物の内面を推測させる傾向があるが、ここでもランスロットはぶたれた子供のように泣くと描写されるだけで、彼の内面は推し量ることしかできない。ランスロットは、神の恩寵を己の罪に対する懲らしめと解釈したのかもしれない。あるいは神への感謝の念と同時に、罪に汚れた己の惨めさを痛感したのかもしれない。ここでは、慈愛に満ちた偉大なる神の前での、神を蔑ろにし、王妃のためだけに己の武力を用いてきた騎士ランスロットの哀れな姿が描かれる。ぶたれた子供は、その痛さゆえに二度と過ちを繰り返さないとその時は思うが、やがてぶたれた痛さを忘れたように再び悪さをしてしまう。

マロリーの荷車の騎士の物語は、ウルリー卿の傷の癒しのあと幕を閉じる。そして次のような作者独自の加筆がある。

For, as the Freynshe booke sayth, because of dyspyte that knyghtes and ladyes called hym “the Knyght that rode in the Charyot”, lyke as he were juged to the jubett, therefore, in the despite of all them that named hym so, he was caryed in a charyotte a twelve-monethe; for but lytill aftir that he had slayne sir Mellyagaunte in the quenys quarell, he never of a twelve-moneth com

on horsebak. And, as the Freynshe booke sayth, he ded that twelve-moneth more than fourty batayles. (III: 1154)

この引用の中で“as the Freynshe booke sayth”とあるが、ここでは原作をそのまま用いているように思えるが、マロリーの場合、独自の加筆を行う場合によくこの表現を使い、ここでも原作にないものを加えている。注目すべきは、メレアガンを殺したあと、一年間、荷車に乗り、多くの闘いをしたことである。ただし、ウルリーの傷の癒しの時は、ランスロットは馬に乗って宮廷に帰って来る（マロリーの場合時々細かい点で矛盾が生じることがある）。問題は、彼が荷車に乗る動機である。上の引用では、“dispyte”が二回使われている。彼は“dispyte”には“dispyte”で応じるのである。荷車に乗ったランスロットを処刑場に連れて行かれる罪人扱いにした人々の彼への侮辱の態度に対して、憤懣、恨み、蔑みの念から、馬に乗らず、荷車に乗って闘うのである。“in the despite of”という表現であるが、マロリーの作品で合計二カ所で使用されており、もう一つの例が、キャクストン版第20巻に出てくる。アーサーとともにランスロットを追ってフランスに着いたガウエインがランスロットと一騎打ちする場面である。不倫の罪故に火刑を宣告された王妃を救い出すときに、不運にもランスロットは武具を身につけていないガウエインの弟ガレス (Gareth) とガヘリス (Gaheris) をそれとは知らず殺してしまうが、その行為を非難して、ガウエインは“... thou slewyte hem [Gareth and Gaheris] in the despite of me” (III: 1189) と言う。このときのガウエインは、弟を殺したランスロットへの怨念と復讐心にとりつかれ、理性を失っている。このガウエインと同じように、理性を失い、ウルリーの傷の癒しで示された神のあふれんばかりの慈愛を忘れ、世間の彼に対する軽侮の念が的を射ているのにもかかわらず、荷車が王妃との愛の象徴であるがごとく、傲慢にもこれ見よがしに荷車に乗るのである。クレチアンのランスロットのように、愛が理性を支配するのである。荷車が二人の愛の罪の象徴であることに彼は気

づいていない。彼こそ主君アーサーへの裏切り行為により処刑場へ荷車に乗って運ばれて行くべき存在なのである。ここには、ウルリーの傷の癒しでみせた彼の遜った態度は微塵もない。作者はさらに次の一節を加筆する。“But every nyght and day sir Aggravayne, sir Gawaynes brother, awayted quene Gwenyver and sir Launcelot to put hem bothe to a rebuke and a shame” (III: 1153). この一節は、第18巻冒頭の、王妃とランスロットの不義に関する次の一節に呼応する。“... they loved togydirs more hotter than they dud toforehonde, and had many such prevy draughtis togydir that many in the courte spake of hit, and in especiall sir Aggravayne, sir Gawaynes brothir, for he was ever opynne-mowthed” (II: 1045). メレアガンの城が“many such prevy draughtis”のひとつとなり、マロリーははじめてアンドレアス・カペルラヌスの言う愛の第四段階をあらさまに描いたのである。王妃とランスロットの愛は“trew love”であるが、それは“vertuose love”ではありえず、いかに罪深いものであるかを、二人の愛に共感をもちながらも、独自の恋愛論で定義し、その具体例を荷車の騎士のエピソードで描きだしたのである。二人の“trew love”はアーサー王の宮廷に悲しい出来事を招来する。荷車の騎士の物語は、波乱含みのうちに終わる。第20巻では、いよいよ王妃とランスロットの不義が暴かれ、アーサー王の宮廷は崩壊へと向かう。プロットの展開において、マロリーは絶妙の位置に「荷車の騎士」を組み込んだのである。

## おわりに

クレチアンの『荷車の騎士』において、ランスロットとの決闘裁判の戦いで、怒りに狂ったメレアガンは命乞いをするのも忘れ、あつけなく、その敵によって首を討ち取られる。そのあと宮廷の“*grant joie*” (Kibler 7094) が語られ、エピローグへと続くのであるが、このロマンスでは、王妃とランスロットの不倫が歓喜にみちたアーサー王の宮廷に暗い影を投げかけることまで描



かれることはない。詩人の態度は批判的であるが、12世紀に一世を風靡した宮廷風恋愛のありようが描かれ、アーサー王宮廷の行く末は詩人の眼中にはない。

やがて13世紀になって、クレチアンの韻文ロマンスは、流布本物語群の中に取り入れられる。この物語群では、聖杯探求という宗教的要素が加わり、しかもアーサー王の死まで語られる。それまでにない大きな展望のもとで、宮廷風恋愛物語が変貌を遂げることになる。荷車の騎士のエピソードは聖杯探求の前に組み込まれ、王妃とログレスの人々を見事に救い出したランスロットは、墓場の冒険で失敗し、しかもその彼を凌駕する騎士、息子で純潔なガラハッドが誕生し、聖杯探求で成功する。原作と比べてプロットに関して大幅な変更は加えられていないが、宮廷風恋愛のもつ危うさが示唆されている。

15世紀、マロリーは原拠である散文ロマンスに大きな改編をほどこす。プロットを大幅に削除し、王妃とランスロットの同衾とそれを巡る決闘裁判に焦点をあてる。また作者は、荷車の騎士のエピソードを聖杯探求の後に組み入れ、二人の密会の後につづくアグラヴェインらによる不義の告発と密接な関連性をもたせる。しかもこの密通の罪を犯した二人の愛がいかなるものかを独自の恋愛論で定義する。恋の季節であり、また円卓騎士団瓦解の端緒となった出来事が起こる5月をうまく背景に使いながら、作者は、二人の愛を、クレチアンのように批判的に描くのではなく、共感をもって、しかし、いかにそれが罪深いものであるかを語るのである。罪深い愛であるからこそ、作者は、二人の改悛を丁寧、心をこめて、詳細に叙述し、“stabilité”を貫いた二人に“good ende”を与える。このようにクレチアンの『荷車の騎士』は300年を経て大きく変容しながら、アーサー王ロマンスの集大成であるマロリー作『アーサー王の死』のプロットの展開において不可欠のエピソードとなったのである。

## 参考文献

- Andreas Capellanus. *The Art of Courtly Love*. Trans. John Jay Parry. New York: Norton, 1969.
- Bruckner, Matilda Tomaryn. "Redefining the Center: Verse and Prose *Charrette*." *A Companion to the Lancelot-Grail Cycle*. Arthurian Studies 54. Ed. Carol Dover. Cambridge: D. S. Brewer, 2003. 95-105.
- Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Ed. Larry Benson. 3rd ed. Boston: Houghton Mifflin, 1986.
- Chrétien de Troyes. *Arthurian Romances*. Trans. William W. Kibler. London: Penguin, 1991.
- . *Lancelot or, The Knight of the Cart (Le Chevalier de la Charrete)*. Garland Library of Medieval Literature Series A. Vol. I. Ed. & trans. William W. Kibler. New York: Garland, 1981.
- Cooper, Helen. "The Lancelot-Grail Cycle in England: Malory and His Predecessors." *A Companion to the Lancelot-Grail Cycle*. 147-62.
- Dante Alighieri. *The Divine Comedy of Dante Alighieri: I Inferno*. Italian Text with translation and comment by John D. Sinclair. London: Oxford UP, 1971.
- Duggan, Joseph J. *The Romances of Chrétien de Troyes*. New Haven: Yale UP, 2001.
- Fichte, Jeorg O. "From 'Shyvalere de Charyot' to 'The Knyght That Rode in the Charyot: Thoughts on Malory's Adaptation of the *Vulgate Lancelot*.'" *Genres, Themes, and Images in English Literature: from the Fourteenth to the Fifteenth Century*. Tübingen Beiträge zur Anglistik 11. Ed. Piero Boitani & Anna Torti. Tübingen: Gunter Narr, 1988. 73-89.
- Gaunt, Simon. *Love and Death in Medieval French and Occitan Courtly Literature: Martyrs to Love*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Hodges, Kenneth. "Wounded Masculinity: Injury and Gender in Sir Thomas Malory's *Le Morte Darthur*." *Studies in Philology* 106.1 (2009): 14-31.
- Kato, Tomomi, ed. *A Concordance to the Works of Sir Thomas Malory*. Tokyo: U of Tokyo P, 1974.
- Kay, Sarah. "Who Was Chrétien de Troyes?" *Arthurian Literature* XV. Ed. James P. Carley & Felicity Riddy. Cambridge: D. S. Brewer, 1997. 1-35.
- Kelly, Robert L. "Wounds, Healing, and Knighthood in Malory's Tale of Lancelot and Guenevere." *Studies in Malory*. Ed. James W. Spisak. Kalamazoo: Western Michigan U, 1985. 173-97.
- King Arthur's Death: The Middle English Stanzaic Morte Arthur and Alliterative Morte Arthure*. Exeter Medieval English Texts and Studies. Ed. Larry D. Benson. Exeter: U of Exeter P, 1986.

*Lancelot: Roman en prose du XIIIe siècle.* Vols. I and II. Ed. Alexandre Micha. Geneva: Librairie Droz, 1978.

*Lancelot-Grail: The Old French Arthurian Vulgate and Post-Vulgate in Translation.* 5 vols. Ed. Norris J. Lacy. New York: Garland, 1993-96.

*Lancelot of the Lake.* Trans. Corin Corley. Introd. Elspeth Kennedy. Oxford: Oxford UP, 1989.

Malory, Sir Thomas Malory. *Le Morte Darthur.* 2 vols. Ed. H. Oskar Sommer. New York: AMS, 1973.

———. *The Works of Sir Thomas Malory.* 3 vols. Ed. Eugène Vinaver & rev. P. J. C. Field. 3rd ed. Oxford: Clarendon, 1990.

Norris, Ralph. *Malory's Library: The Sources of the Morte Darthur.* Arthurian Studies 71. Cambridge: D. S. Brewer, 2008.

## Synopsis

### The Transformation of Chrétien de Troyes' *Le Chevalier de la Charrete*

Kenichi Akishino

As far as the extant manuscripts of Arthurian romances are concerned, Lancelot for the first time appears as a knight who loves Queen Guenevere adulterously in *Le Chevalier de la Charrete*, or *Lancelot* composed by Chrétien de Troyes in the twelfth century. According to the prologue of this verse romance, the subject matter and meaning or interpretation (“*matiere et san*”) were given him by Marie de Champagne. The subject matter is considered to be the abduction of Guenevere by Meleagant and Lancelot’s rescue of her from the villain. As for the “*san*”, the adulterous relationship between Lancelot and Guenevere is interpreted as courtly love. This romance depicts their love as the epitome of *amour courtois* whose codification was attempted by Andreas Capellanus in the *De Amore* in the late twelfth century. In the thirteenth century the anonymous prose romance *Lancelot* exploits Chrétien’s *Lancelot*; this text adapts the earlier one, and takes the story up just after the death of Galehaut, who loves Lancelot beyond friendship, and who intercedes with Guenevere for Lancelot and enables Lancelot to receive a first kiss from her. This prose *Charrete* narrates the birth of Galahad, son of the sinful Lancelot and future hero of the Grail quest; Galahad’s presence overshadows his father’s glory as the best knight of the Round Table, and causes the author to revise his source where the Christlike Lancelot liberates Guenevere and the people of Logres

from the villainous Meleagant. In the fifteenth century Sir Thomas Malory uses the prose *Lancelot* as one of his sources in writing *Le Morte Darthur*. In Malory's *Arthuriad*, the episode of the Knight of the Cart is inserted between that of the Maid of Astolat who dies for love of Lancelot and that of Agravain's accusation concerning Guenevere's illicit relationship with Lancelot. As a result, Lancelot's sharing the same bed with Guenevere at Meleagant's castle is closely connected with Agravain's disclosure of their love to King Arthur. In incorporating the Knight of the Cart episode into his work, Malory displays his extraordinary skill in adaptation. Moreover, he adds an exposition of his ideas about love to his source. This paper investigates how Chrétien's romance is transformed, comparing Chrétien's *Charrete* with the Knight of the Cart episode in the two prose romances.

Chrétien's *Charrete* is transformed in the two prose romances according to how the story of the queen's abduction is incorporated into them. In Chrétien's romance, Lancelot, who himself committed the sin of adultery with Guenevere, vanquishes Meleagant in judicial combat and proves her innocence by armed force. Consequently, Arthur's court is filled with "grant joie." In this text Lancelot and Guenevere's illicit love does not cast an ominous shadow over Arthurian chivalric society. Although the poet demonstrates a critical view of courtly love, he takes no notice of the tragic ending of Arthur's court. In the thirteenth century, Chrétien's *Lancelot* is incorporated into the prose *Lancelot*, the oldest branch of the *Lancelot-Grail Cycle*. In the *Lancelot-Grail Cycle*, Galahad for the first time sees directly the mystery of the Grail, and Mordred's rebellion against King Arthur, his father, leads the Round Table to ruin. In this context Chrétien's love story undergoes a transformation. The story of the Knight of the Cart is inserted before the Grail adventures, and in rescuing the queen from Meleagant,

Lancelot, unlike Chrétien's Lancelot, does not succeed in one of the two tomb adventures; his failure shows that Galahad, his son and the hero of the Grail quest, will surpass him in chivalry. In his adaptation of Chrétien's romance, the author indicates the perils of the adulterous love affair between Lancelot and Guenevere. In the fifteenth century Sir Thomas Malory drastically alters the story of Lancelot's rescue of the queen from his source, the prose *Lancelot*. Malory simplifies the complicated development of plot of his source and concentrates on the abduction of the queen by Meleagant, on Lancelot and the queen's tryst, and on the consequential judicial combat between Lancelot and the abductor. Moreover, Malory incorporates the episode after the Grail quest and, just before narrating Meleagant's treason, explains his idea of love and calls Guenevere a "trew lover." He does not describe Lancelot and Guenevere's illicit love critically, ironically and humorously as Chrétien does. He shows his sympathetic attitude toward their sinful love. Because of the sinfulness of the love, the author depicts their penance in detail and gives each of them a "good ende." Chrétien's *Le Chevalier de la Charrete* is thus transformed, and the two lovers' adulterous love, which Chrétien for the first time introduced into Arthurian romance in the twelfth century, is indispensable to Malory's delineation of the downfall of the chivalric community of King Arthur.